

読書

「看雲(かんうん)文庫」と呼ばれるコレクションは、美濃国厚見郡(現岐阜市加納)の酒造家宮田家(屋号「和泉屋」)が江戸中期から明治期にかけて代々収集した千五百点余の和書・漢籍から

県図書館に行こう

こんな情報^①が待っている

成り、六代目当主宮田嘯台(しょうだい)(一七四七―一八三四年)が収集したものが中心となっている。

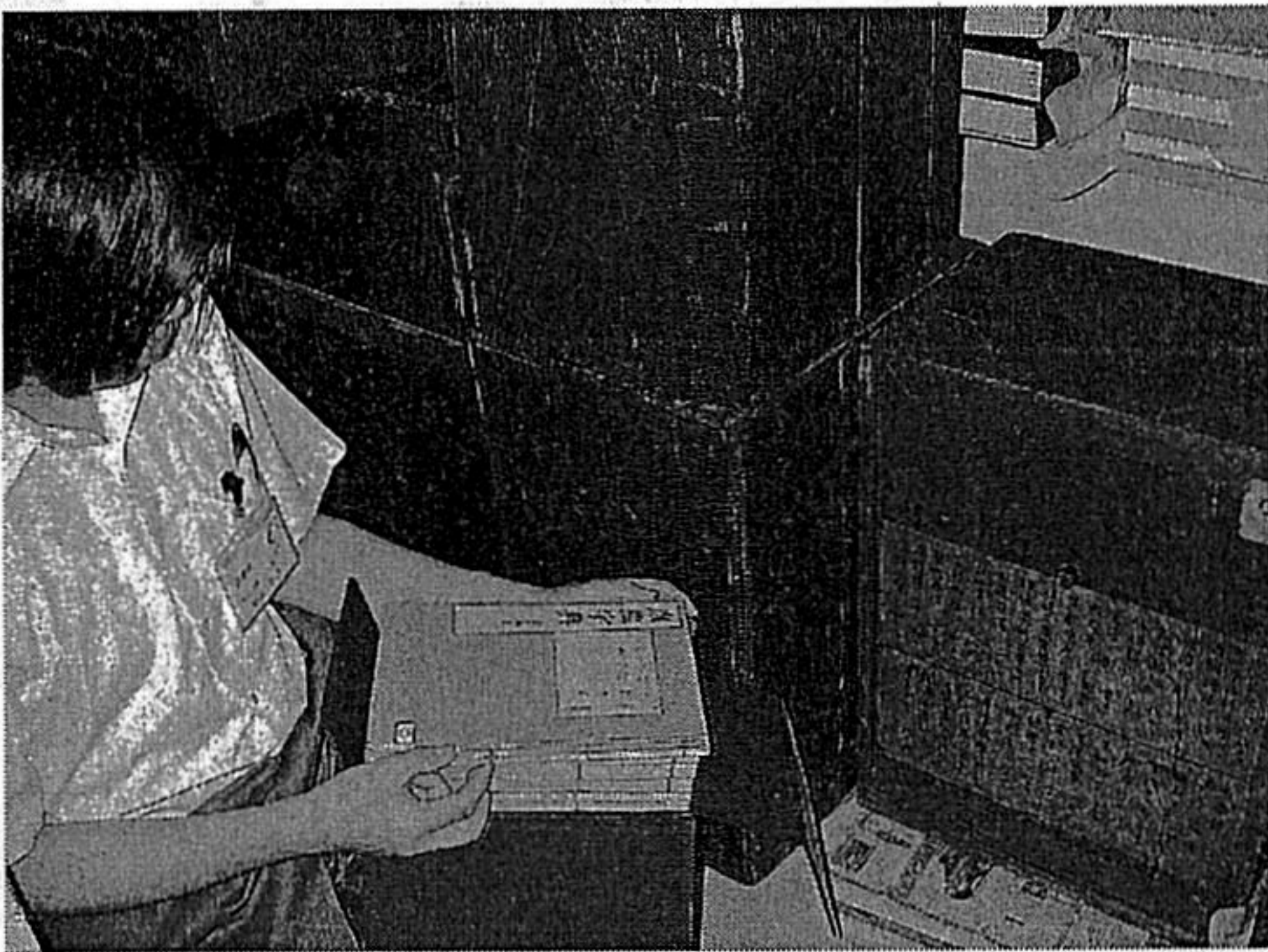
書籍の名を記した紙を貼り付けたものもあった。文庫に収められている書籍は「看雲文庫目録」により調べることができ

一九九八(平成十)年に宮田家より寄贈を受け、新図書館の特別文庫の一つに加わった。文庫

嘯台は折衷学派の漢詩人で、江戸出身の加納藩儒学者梁田蛻巖(やなだ

町人層の教養伝える

宮田家寄贈の看雲文庫



江戸中期から明治期にかけての貴重な和書、漢籍が収められていた「看雲文庫」の木箱

ぜいがん)(一六七二―出身の江村北海(一七〇一―一七五七)の弟子で京都 七一―七八二)に漢詩を

学び、岐阜詩壇の重鎮として活躍した。

美濃の漢詩人二百余人による一大詞華集「三野風雅(みのふうが)」には、嘯台の漢詩が最も多く、二十八首が採録されており、中でも「長良川観魚」は鵜飼の情景を詠んだ詩として有名。

江戸中期以降は、平和な世相の下で数々の文化が栄え、町人層にも高い教養を身につける人びとが増えた。階級を越えた文学結社が各地に誕生したのもこの時期。当コレクションが所蔵する論語などの漢文学習書、日本の和歌集、医学書、農業全書は、当時の町人が身に付けた教養の多様さを今日に伝えている。